

古代史に遊ぼう

第30回 -神話と謎の熊野紀行 その4-

熊野紀行第二夜が明けた、この宿は海岸からやや距離がある高台にあり、前日の勝浦の宿のように熊野灘からの日の出をパノラマのように見ることはできないが、町並みを越した水平線から昇る朝日を見ることはできた。神日本磐余彦（神武）の東征には五瀬命、稲飯命、三毛入野命の三人の兄が付き添っていた。そのうち五瀬命は長髓彦との生駒越えの戦いで深手を負い死に、敗退した神武軍は紀伊半島に沿って海上を迂回する作戦をとることになる。その船団は熊野灘で嵐に遭い、稲飯命、三毛入野命は上陸直前に遭難した。その場所はさらに北の熊野市二木島町の沖合いだといわれている。浜の民たちが小舟で嵐の海を救助に向かったという伝承に由来して、「関船」と呼ばれる二隻の櫓船が速さを競う祭りが、二木島湾の入り口を挟んだ岬の間で行われている。岬の両側には室古神社と阿古師神社があり、神武の兄たちのほか豊玉彦・豊玉姫、熊野大神、伊勢大神などが祀られている。祭りは11月はじめに行われているということだが、古代からの伝承が語り継がれて、神武の亡き兄たちの鎮魂儀式が綿々と続いているのは奇特なことである。

暴風に遭い漂った船団が上陸したのは、丹敷浦（現在は三重県紀勢町錦）で、この土地では上陸を記念するギッチョウ祭りが地域の人々の楽しみとなっている。上陸の伝承地は他にも那智勝浦があるが、錦が上陸地だとすると東征の道に入るためには、いったん熊野街道を尾鷲よりも南下してから山に分け入ることになる。細かい詮索は置くことにして、兄たちを失った神武が熊野の山中に分け入ったように、我々も宿を出て海岸に添って鬼ヶ城を過ぎたあたりから、北に向かう42号線で山に入る。トンネルで小坂峠を過ぎ、左折すると東熊野街道である。神武軍が熊野からこの道を通って大和に入ったという東征の道はこれである。もう一つの吉野路ともいわれ、15世紀には南朝の遺臣らもさかんに往来し、また熊野から大和へ海の幸を運ぶ生活道路として多くの人たちに今日まで利用されてきた。紀伊半島の中央部山塊は「果無山脈」と呼ばれるが、その名の通りあたりは山また山と重なる山並みの連続である。森には高温多雨が育んだつる草や木の根、細かい苔・地衣やシダが共生して、太古を思わせるものがある。

しかし、現代の道路は練達の案内人「八咫鳥」に導かれないと辿れないような難路ではない。やがて池原ダムに突き当たり、温泉つき宿泊施設や各種アウトドア施設の完備した総合スポーツ公園があるが、さすがにこの時期の週日は森閑として人影もない。ここで小休止の後、北山川に沿って谷を一路北上する、左手には大峰山脈がそびえている。その尾根を走る大峰奥駈道で修行する山

伏に思いをはせ、北山川溪谷の眺望を楽しみつつ走ると、上北山村「道の駅」で対岸には上北山温泉があり、その先にそびえる峰は大台ヶ原である。道の駅で土地の物産品を冷やかし、買い物をして再び谷の路を遡上し続ける。支流の天瀬川を遡って一の峠に至る分岐を過ぎ、さらに走ると左手に和佐又山への登山口がある。次の谷の橋を渡りきると、すぐに新伯母ヶ峰トンネル入り口である。モダンなトンネルを抜けると道は急峻な下りとなり、途中には名高いループ式のトンネルや橋が設けられている。あたりの素晴らしい眺望を楽しみつつ下っていく、一つ一つの支谷にはそれぞれ支流があり、それらを合わせつつ流れはやがて吉野川となる。吉野川の源流「水源地の森」は「三之公川」という名の支流を遡ったところが指定されているらしいが、どれがそれに当るのかはわからなかった。弥生時代に海人族（安曇族）が川を遡り、上流に達したという記録は列島内の至るところに存在するが、この熊野川・北山川を遡り伯母ヶ峰峠を越え吉野川の川尻に達する経路を船で遡るのはまず無理なことと思われる。従って、しかるべき場所で船を捨て歩いたのであろうと推察される。

横道を左にそれて登り、由緒ある龍神を祀る丹生川上神社上社を訪ねる。15年前に丘上の現在地に移転したということだが、元の社殿は眼下に見えるダム湖に沈んでいて、湖のなかにタイル状の四角い模様板を浮かべて鎮座していた位置を示している。丹生とは朱の産生地、朱の原料である辰砂＝硫化水銀を産する水銀鉱床のある地域に丹生川、丹生神社などが分布している。祭神は辰砂の産出を司る丹生都比売神で、祭祀を丹生氏が司っていた。しかし、その後水銀精錬・鍍金の技術を持ち込んだのは秦氏で、辰砂と水銀の利用はその秦氏の手に移り、祭神の性格は龍神に変わったということである。紀伊半島では伊勢から紀ノ川河口までの中央構造線沿いには水銀鉱床が分布しており、そこに丹生の名のつく古社が多数存在する。神武軍が進軍路の途中で「毒気」に当てられたというのは、急性の水銀中毒、鉱山の排ガスなどが「毒気」ではないかと説が有力である。



● ダム湖の中の模様板

街道に戻りしばらく走ると、川上村の中心地「宮の平」で、手前からホテル杉の湯、道の駅、川上村役場が並んでいる。駐車場に車を止め、遅い昼食を摂る。協議の結果、予定していた吉野・大宇陀での立ち寄り先をパスして、一路奈良まで帰ることに衆議一決して、出発する。五社トンネルから吉野宮滝方面に出るのは止め、大滝ダムを過ぎて左折し、木工の里を経て国栖へ抜け、国道307号線に入って北上する。吉野町から大宇陀町へと交通量の少ない道を快適な走り、やがて左手に竜門岳が見えだし、町の中心部に入る。小憩ののち、再び北に向かい左折して女寄峠トンネルから忍坂を下ると櫻井である。ここからはおなじみの道进行き、当初の予定の通り奈良に日の暮れぬうちに帰着した。

1ヶ月半ほど経過した初夏の一日、先にパスをした宇陀・吉野のポイントを奈良から再訪した。奈良盆地の南部、三輪山麓からその東部地域が磯城にあたり、その南の天香具山週辺が磐余である。初瀬川に沿った現在の桜井市に位置するのが忍坂、初瀬川に添って初瀬街道（近鉄線と並行して走る）に往くと墨坂である。これらはいずれも東征の激戦地として記紀に登場する要所であり、またユニークな首長と住民がいたという場所でもある。

まず、榛原の墨坂神社に詣でる、東征の合戦地墨坂に祀られていた「大神」を文安六年（1450）に墨坂大神として、現在地に遷座したとのことである。次は榛原から菟田野に向かう県道沿の八咫鳥神社詣で、



● 八咫鳥石像(上)、宮滝遺跡(下)



慶雲二年（705）の創祀された神社である。拝殿の横に、2002年のW杯記念のユーモラスな八咫鳥の像がある。さらに宇太水分神社中社（国宝）、阿紀神社などに立ち寄り、いずれも垂仁天皇の旧跡である。かぎろいの丘万葉公園の茶店で「ヨモギそば」の昼食をとり、約束の時間に遅れぬように吉野歴史資料館へと急ぎ向かう。

古代吉野の中心地宮滝の吉野町公民館の2階にある、吉野歴史資料館では宮滝遺跡から出土



● 吉野離宮

生のムラ、飛鳥時代の吉野宮、奈良時代の吉野離宮などが展示の目玉である。ここで注目すべきは縄文時代から人びとは寒い時期を吉野川の下流域で過ごし、暖かくなると川を遡って宮滝で暮らしていた。その行動範囲は遠く河口（紀ノ川河口）にまで及んでいたことは注目すべきことである。というのは、神日本磐余彦の東征路にはもう一つの説があり、その説では紀ノ川を遡って宇智に至り、吉野をへて山を越えて宇陀に入っている。これは縄文以来の吉野川を上下する経路と同じであり、船での遡上も遙かに容易である筈である。これも辿って体験する楽しみがあるので、愉快なことだが「古代史に遊ぶ」種は尽きないということになる。



● 大名持神社

宮滝の下流に吉野川を挟んで妹山と背山がある。文楽や歌舞伎の「妹背山婦女庭訓」の舞台である。その妹山の森には大名持神社が鎮座しているが、その神社下の吉野川の河原は「潮生淵」と呼ばれ、毎年6月末日にそこに熊野灘の水が湧き出でるという言い伝えがある。桜井市の多武峰ではこの河原の石を拾って祀り、産土の神の秋祭をすることが行われている。この吉野川の水への信仰は、海人たちの熊野の黒潮の記憶が底流にあるとも考えられるのである。支流の象の小川を渡って桜木神社に詣で、また世尊寺（比曾寺跡）にも訪れたが、今回の目的からは外れるので省略する。

（岡野 実）